

## D.C. グリーンの『Tenrikyō』 (2)

おやさと研究所准教授  
尾上 貴行 Takayuki Onoue

D.C. グリーン博士による天理教に関する論文『Tenrikyō; or The Teaching of the Heavenly Reason』(天理教一天の理の教え)は、明治28年(1895年)3月13日築地で開催された日本アジア協会の例会において口頭で発表された。その後、同月23日発行の『The Japan Weekly Mail』にその発表の要旨が掲載されている。これはグリーン論文が公の目に触れた最初であると考えられる。以下、同紙に掲載された記事の内容をみていく。

グリーン氏は、まず日本における神道について簡単に説明。神道は日本の宗教界において重要な位置を占めていると述べ、天理教はその影響力と急速な発展により、神道各派のなかで現在もっとも重要であると紹介した。そして日本の一般民衆の宗教状況やその心理的現象を知るうえで、天理教は大変興味深いと述べる。次にグリーン氏は、今回の研究を行うにあたり、天理教聖典の写本、東京や京都などの教会で行われた説教、天理教教師や布教師へのインタビュー、そして仏教や神道関係者による出版物などを参考にすると説明した。

続いて天理教の教祖みきに言及。教祖は日本の古都奈良から南へ6マイルほどのところにある三島村に住む農夫の妻で、1798年に生まれ1887年10月26日に亡くなったと紹介している(筆者注、1月の誤り)。ついで、天理教の神の顕現の様子について次のように説明した。教祖40歳の時、息子の足にひどい腫瘍ができ歩けなくなったが神への祈祷により治癒したという出来事があり、教祖みきは3日間昏睡状態に陥った。最後に彼女はひきつけを起こし、彼女の口から言葉が発せられ、それはクニ・トコ・タチ・ノ・ミコトという神によるものであると宣言された。しばしの静寂の後、ほかの9柱の神々が次々と現れた。みきはこれら10柱の神々の女性預言者とされ、この神々は自らをテニリ・オー・ノ・ミコトと呼んだ。これが天理教の始まりである。

グリーン氏は、教祖存命中天理教に対して世間から多くの激しい反対があったが、教祖が亡くなってから6カ月後には政府の認可が下り、それ以来急速に発展していると述べ、三島の神官によれば現在1万人の priests and preachers (祭司と説教者)がおり、信者は140万人に及ぶと説明した。そして、そのほとんどが下層階級の人々であるが、その団結心はこの教団の大きな力となっており、この一派の代表はここ数年国防のために5万円を政府に寄付することが出来ていると言われていると述べた。

そしてグリーン氏は、みきの教えによれば、もともとは単なる泥の梅であったこの世界は、10柱の神々の力によって創り変えられ、人間が住むようになったとして、彼女の説く人間創造について次のように紹介した。

(A)mong these the two first, Kuni-toko-tachi and Omotari no Mikoto, who represent respectively the moon and the sun, constituted the real source of creative power. Omiki differs from the orthodox Shinto writers, both as to the names and sex of these deities, but the pressure of public opinion had led to a revision of the original teaching in the interest of orthodoxy. After a time Izanami-no-Mikoto gave birth to 999,999 pigmies

six-tenths of an inch in height. These in the course of ninety-nine years grew to be four inches tall. They were followed by an equal number which grew to be five inches tall. Then Izanami died in great joy, because she saw in this advance the promise of a future race of men of five foot stature the fulfillment of the creative purpose. At this point, the direct agency of the Gods appear to have ceased, and similar pigmies of gradually increasing size were born in groups of ten, and later on in pairs. By this time the stature had become three feet. Thence the evolution went on until man reached his normal height and the world its present aspect. (この10神のなかの2神、クニ・トコ・タチとオモタリ・ノ・ミコトはそれぞれ月と太陽を象徴し、人間を創造する力の根源となっていた。オミキは正統派神道の著述者とは異なる神々の名前や性別を述べていたが、世論の圧力により正統派に添うように教えを修正した。しばらくして、イザナミ・ノ・ミコトは身長が1インチの6/10の小人を999,999人産んだ。これらは99年経って4インチまで成長した。彼らに続いて同数の小人はやがて5インチまで成長した。するとイザナミはこの成長の様子から、やがて身長5フィートの人間になるという人間創造時の約束が達成されると見て、大いに喜んで亡くなった。この時点で神々の直接的な働きは止まったようである。同じように徐々に大きくなっていく小人は一度に10人生まれ、さらにのちには一度に2人が産まれるようになった。その時までには身長は3フィートになっていた。その後も進化は続き、人間は現在の身長になり、世界も今ある形となった。)

グリーン氏が入手できた天理教の教義書は、写本(おふでさきの一部、筆者註)と印刷された12の聖歌(みかぐらうた、筆者註)などであり多くはなかった。教祖みきや教えなどを記した者たちは無学であったために記述が明瞭でなく翻訳作業は困難で、しばしば推測に頼るしかなかった。例えば、教義書の文体は、通常出版物で使用される文語体と地方の口語体を含む方言表記が混在していたからだ。

グリーン氏は、報告の最後にみきの説教(おふでさきの一部、筆者註)からいくつか引用し、次回の報告では聖歌、この一派の教義、そして礼拝と布教方法について発表する予定であることを述べ、今回の報告を終了した。

報告後の質疑応答では、出席者の一人が、以前にこの一派の教義はキリスト教の教えに影響を受けていると聞いたことがあるがそれは正しいのか、と質問をした。それに対しグリーン氏は、信者たちが明確に意識しているとは思えないが、この教えにキリスト教の影響が何らかの影響を及ぼしている可能性は十分あると考えられる、と答えた。こうして会合は5時半に終了した。

この3月の例会で報告された内容は、同年12月『日本アジア協会紀要』に掲載された論文のうちのおおよそ前半部分にあたる。『The Japan Weekly Mail』の紙面の都合で報告内容の要旨のみが掲載されていると考えられるが、教祖の生い立ち、神の顕現、そして人間創造の話に関して多く記述されていることから、当時の人々の関心度合いがうかがえる。